

②論文要旨（博士後期課程）

<p>論 文 要 旨</p>
<p>申請者氏名：池田 純</p>
<p>申請学位：博士</p>
<p>主論文題目：反義併存的な語に関する研究</p>
<p>主論文要旨（邦文は4,000字以内 外国語は2,000語以内）</p>
<p>本博士論文は、全8章の構成である。内訳は、「第1章 序論」「第2章 総論」「第3章 結構」「第4章 大丈夫」「第5章 適当」「第6章 微妙」「第7章 やばい」「第8章 結論」となる。なお、「第2章 総論」に対し、「第3章 結構」から「第7章 やばい」までを「各論」と位置付ける。次に各章の構成をみる。「第1章 序論」の構成は、「1.1本論文の構成」「1.2背景および目的」「1.3凡例・その他」となる。「第2章 総論」の構成は、「2.1意味の変化」「2.2類義」「2.3反義」「2.4多義」「2.5あいまい性」「2.6反義併存」「2.7表記の多様性」となる。「第3章 結構」の構成は、「3.1概論」「3.2 先行研究および資料」「3.3近代の辞書における「結構」」「3.4現代の国語辞書における「結構」」「3.5類語辞書における「結構」」「3.6「結構」の語義関連表」「3.7「結構」の実例」となる。なお、「第4章 大丈夫」「第5章 適当」の構成は、「第3章 結構」と同様の形式をとる。「第6章 微妙」の構成は、「6.1概論」「6.2先行研究および資料」「6.3近代の辞書における「微妙」」「6.4現代の国語辞書における「結構」」「6.5『現代用語の基礎知識』過去約30年分における「ビミョー」の変遷」「6.6類語辞書における「微妙」」「6.7「微妙」の語義関連表」「6.8「ヨミダス歴史館」における「微妙」の年代別検索結果（平成期）」「6.9「微妙」の実例」となる。「第7章 やばい」は、「7.1概論</p>

(「俗語」「隠語」「若者語」「流行語」とは)「7.2 先行研究および資料」「7.3 近現代の特殊用途辞書等における「やばい」」「7.4 近現代の一般辞書における「やばい」」「7.5『現代用語の基礎知識』過去約50年分における「やばい」の変遷」「7.6 類語辞書における「やばい」」「7.7「やばい」の語義関連表」「7.8「ヨミダス歴史館」における「やばい」の年代別検索結果(平成期)」「7.9「やばい」の実例」となる。「第8章 結論と課題」は、「8.1 まとめと結論」「8.2 今後の課題」となる。巻末に、「参考文献・資料」「その他参考資料」を添付した。続いて、本博士論文における背景と目的を以下に示す。現代語における多義語の一部に、一語の中にプラス評価の意味とマイナス評価の意味が同時に存在するものがある。いわゆる反義併存的な性質を持つ語である。本稿においては、「反義併存」の定義について、『現代言語学辞典』(1988)、“ambivalence「反意併存」”の項目を援用し、「一つの語の中に反義的な二つの意味が共存すること」としておく。この反義併存的な性質を持つ語は、使用場面によっては、あいまい性を示すこともあり、ミスコミュニケーションの一因となることもある。反義併存性を示す語の典型として、「やばい(「第7章」)」という語が挙げられる。「やばい」は、隠語 出自の語であり、それが一般社会に入り定着した語である。「やばい」の本来の意味は、「身の危険なこと。危険な場所のこと。」(「7.3.8『隠語構成様式並に其語集』(1935)～」参照)とみなされるが、現代においては、「あぶない・最悪な状態にも、すごくいいとき・最高の状態にも使う。」(『現代用語の基礎知識 2003年版』ほか、「7.5『現代用語の基礎知識』～」参照)といった反義的な意味も現れてきている。ただし、「プラス評価性の状況において、「やばい」を使うこと」は、世代による差がみられるため、やはり意思疎通の障害要因となることもしばしばみられる(「7.2.2 文化庁(2005, 2015)」「7.2.5 窪菌晴夫(2017)」参照)。なお、上述の反義併存性を示す語については、第二言語としての日本語話者にとってもしばしば問題となるようである。セイン・長尾(2012)では、第二言語としての日本語話者(広く日本に滞在する外国人)がしばしば直面する、「日本語の壁」について触れている(「第3章 結構」「3.1 導入」参照)。それによると、例えば、断りの場面における「結構です」という語をめぐるやりとりを挙げ、「日本語は、Yes なのか No なのかがよくわからない!」「その言い方で、どうしてそんな意味になるのか?」と憤慨するという場面がある。セイン・長尾によると、「私たち日本人が「当たり前」と思っていることも、彼ら外国人の人たちから見ると、「へんだよ、おかしいよ」ということが、たくさんあるのです」ともある。ただし、上記の断りの場面における「結構です」などは、日本語母語話者にとってみても場合によっては「Yes なのか No なのかがよくわからない」といった場面に出くわし、結果として互いの意思疎通がうまくいかなかったということもしばしばみられる。したがって、日本語母語話者にとっても、決して「当たり前」とは言い切れない側面もあるように思える。しかし、断りの場面において、はっきり“No”と言わず、「結構です」というのは、他者への配慮なり、婉曲表現なり、何らかの意図・目的を持ったものといえるはずである。筆者は、以上のような背景をふまえ、「反義併存的な性質を持つ語」が日本語には比較的多いということに気づきを得、そこに研究の動機付けを見出した。本稿においては、「反義併存的な性質を持つ語」として、日常で比較的多用される五つの語(「結構(第3章)」「大丈夫(第4章)」「適当(第5章)」「微妙(第6章)」「やばい(第7章)」)を考察対象とした。本稿の目的は、先行の研究・資料等を基に、通時的・共時的な考察も加えた上で、各語がどのような意味の変遷をもって反義併存的な性質を持つに至ったのかについて解明していこうというものである。